

# 特集のねらい

## — 身体社会学のブレイクスルー —

石 岡 丈 昇

今期の編集委員会では、社会学の新たな研究の潮流を生み出すことを目指して、特集を組むことにした。ここに掲載するのは、この新たな特集企画であり、テーマは「身体社会学のブレイクスルー」である。身体をテーマに、社会学の方法や分析道具、さらに問いの立て方について検討することを目指した。

1990年代から2000年代にかけて、身体をテーマにした社会学研究は、さまざまな展開を見せた。先行する1980年代には、記号論や構造主義、さらに消費社会論が盛んに議論されていた。だが90年代に入ると、「記号」から物質性を備えた「身体」へとテーマをシフトする流れが生まれた。社会学の理論においても、権力が書き込まれた身体について論じたミシェル・フーコーや、社会的条件を受肉する行為者について論じたピエール・ブルデュールの仕事が日本に紹介されるようになったことが、その背景にはあった。1991年には雑誌『ソシオロジ』で身体の特集が生まれ、さらに国際的にみても1995年には雑誌*Body and Society*が刊行され始め、身体は社会学研究の一つのトピックとして定着していったと言えるだろう。

しかしながら、そこには大きな課題があった。それは身体をテーマにした研究が、身体を抽象的な分析用語にしたままで、それを扱ったという課題である。だが、社会学が扱う分析項目の一覧の中に身体というそれを新たに加えただけでは、私たちは身体社会学研究を進めたことにはならないだろう。身体とはまずもって、動き、呼吸し、痛み、発汗し、傷つく、具体的なものである。この具体性を起点にすることこそが、身体社会学研究の肝に他ならない。ロイック・ヴァカンが「身体社会学研究は、血肉と共にある生きた身体をまったく扱っていない」(Wacquant 1995: 65)と述べたこと、あるいは井上俊がスポーツ社会学は「体験としてのスポーツ」(「制度としてのスポーツ」ではなく)を探究する必要があると論じたこと(井上 1993)も、この点と関係するだろう。

具体的存在としての身体を、その具体性から離れないで記述し、そこから社会学の方法や調査を再考することが、依然として身体社会学研究の課題でありつづけている。身体「について」社会学の方法を援用して研究するだけでなく、身体「から」社会学の新たな方法や分析を駆動させることが求められている。

本特集では、髪のない女性、異国の柔道場、メキシコシティのボクサーとマルキスト、マニラ郊外の再居住地と、4つの事例が取り上げられている。様々な論点一語りとそれを可能にするコミュニティの形成について、ことばと体感について、都市底辺に生きる人びとが持つ知識について、社会経済的条件のみならず日常感覚から貧困を記述する方法についてなどが、これらの論文から提起されている。一見、対象もアプローチも論点もばらばらに見える4本の論文であるが、そこには具体的な身体「から」社会学の新たな方法や分析を駆動させようとする共通の姿勢が見て取れるだろう。

#### 文 献

- 井上俊, 1993, 「スポーツ社会学の可能性」『スポーツ社会学研究』1: 35-39.  
Wacquant, L., 1995, Pugs at Work: Bodily Capital and Bodily Labour among Professional Boxers, *Body and Society* 1: 65-93.